

流されて大学生 —現代の大学生、30年前の大学生—

はじめに

「最近の学生は冷めている。何を考えているかわからんし。つまらんよ」

「俺たちがあいつくらい歳の歳ではもっとやる気があったんだが」

と、大人達（60年代の学生達）は言っている。

だが本当にそうなのだろうか？

我々は二つの視点から考えてみることにした。一つは教官に対してのインタビューの形。もう一つは学生による文献での調査である。さらにこの二つをふまえた考察を呈示してみた。



昔と今の学生で、学問への関心はどう変わったでしょうか？

昔…学問をやるという事は、「自分がどう生きるかを考えること」であり、「古典や哲学書をごく普通に読み、それについて皆でディスカッションした」そう。だ。「研究者になることを意識して大学へやってきた人も多かった」反面、「それを目指したわけではなくて、成り行きでなった」教官もなかにはいる。いづれにせよ、「学問には積極的に取り組み、自分の要求に応える授業がない場合は、本を自分で買ったり図書館で借りたりして勉強していた」そう。だ。「大学はヒントをくれる教官や施設を整えてくれるもの」という意見もあった。

今…「学生の考え方が多様化」し、例えば「就職、地位や金を得るためにはどうしたらよいか考えるが、学問にあこがれを持つ人は少ないようだ。」しかし、「大学から飛び抜ける勇氣も元氣もなく、皆についていればよいと考えている。そういう考えを出すのが恥ずかしくない（昔は恥ずかしかった）」という。授業態度に関しては、「静かだけどころだらだらしており、教官に対する感謝の気持ちがかけられている」「学者が学問の話をしている事に対する現実性（リアリティ）を感じていないようにぼけっつと見ている」ということだ。

学生の社会への関心はどのようにかわったのでしょうか？

「生きていることにリアリティが持てない世代」「しかし、それは社会全体に言える事」

学生の社会への関心の度合いは低下しているとの回答が多かった。この社会への関心の低下は、そもそも学生に「自分は社会人として生きている。」というリアリティが欠如している為だという。社会が豊かになり、殊更に環境を変えていかなくとも不自由なく生活していける。また、情報はマスメディアを通して向こうから「やってくる」ので、特に苦勞して情報を集める気持ちも起こりにくい。「居心地が良くて適当な時間潰しがあれば、後は何もいらぬ世代」。そんな総括もあった。

一方、社会に無関心であるのは学生だけではなく、現代社会全体に見られる傾向であるとする教官もいた。昔は大学内に、社会への無関心は恥ずかしいという風潮があったという。

学生の社会への関心はそれほど変わっていない（関心の方向が変わっただけ）という回答は少なく（1名のみ）、全体的には学生の社会への関心は低下したと指摘した上で、その事に警鐘を鳴らす内容の回答が多かった。



後

学生同士の友人関係はどのように変わったのでしょうか？

「今の学生は本物の友人関係を築けているのだろうか？」

教官の言葉を借りると今の学生は「表面的に優くなり」「学生同士でスマートに振る舞いすぎ」である。「今の学生は相手を傷つけないようにしている。それは自分も傷つきたくないからだ。」という教官の言葉は、いろいろな学生を見てきた結論であろう。このように今の学生というよりも若い世代は、争うことを余計な勞力と考へて、相手に同調しめごとをさげようとする傾向がみられる。

一方、昔の学生は大半が「特に親しくなくても親しくても反対意見を言って積極的に議論でき、」「口から泡を飛ばしてあわや殴りかからんばかりの気持ち」で情熱的に互いの考えを言い合うことができたのである。しかし、昔の学生にも「議論をするのが嫌だった」人が少数派として存在していた事を忘れてはならないだろう。



インタビューでは、今と昔は変わったとの結果が概ね得られた。では、学生のどこがどう変わったのか。それについて次ページから、社会の変遷にも目を向けつつ、もう少し考察してみた。

執筆：有田・石橋・近澤・三浦

（このインタビューは、60年代に学生であった教官を対象をしり、各コース1名ずつランダムに選出した上でご協力をお願いしたものです。）

教官と学生との人間関係はどのように変わったのでしょうか？

「つきあいはドライになった」

→回答をおおよそ次の三つにまとめてみた。

「基本的に変わらない」

…酒の場での話題などは今も昔も変わらないとのことだ。

「師弟関係を越えたつきあいは希薄になった」

…今は昔に比べ、教官の自宅や研究室に私的に遊びに来る学生は少なくなったとのこと。最近では学生が教官に感謝の気持ちを持たなくなり、教官の方側も教えるということを職業として考えるようになったとの回答もあった。教育のマスプロ化を指摘された方も。

「昔は、教官はもっと畏れ多い存在だった」

…昔は、教官と学生は、特定の学問分野に関する以外は大人として対等であるという意識が双方にあったということだ。「今の大学は学生を子供としてみており、学生の側にもその意識がある」「今の学生は大人としての自分が見えていないが故に他人との距離をはかり切れていないのでは」との声もあった。



この項では30年前の学生と現在の学生との環境、考え、社会面からの記述をしてみた。  
さらに次項では、これらをもとにした上での考察を行った。  
いったい学生はどのように変化したのか?

### 黒電話からPHSへ — 学生をとりまく環境の変化 —

**紛**争時代の学生は、一般的に貧しかったと言える。親からの援助に頼れなかった彼らは、バイトしながら学費を稼いでいた。当時は、そういった学生達をサポートする社会環境が十分整備されていなかった。高度経済成長期で進学熱が高まり、全国に私大が数多く設立されたが、キャンパスの建設が間に合わずプレハブ校舎で授業する大学もあった。こういった、大学と呼ぶにはあまりに劣悪な環境も紛争の一因となったようである。また住宅においては、木造アパートの4畳半・間借りや共同トイレ・共同炊事場といった条件が一般的だった。このように学生達はぎりぎりの生活を強いられてはいたが、彼らが不屈の精神を持ち、自分の考えを確立していたのは、こういった環境と無関係ではない。

### 学生だって楽じゃないよ — 社会の目からは逃げられない —

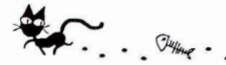
**昔**の学生達は「自由」「平等」という新しい価値観を植え付けられて育った。戦前の教育を受けてきた親世代はそんな彼らにいろいろ期待していた。また、自分の理念・信条のもとに論争し行動している生真面目な学生達に、社会は共感した。一方で、情熱ある理想のもと命がけの主張をしている学生達が、激情的・暴力的に見えた。そのため、学生達が既存の価値観を揺るがしていると見なして社会は困惑し、学生に恐れを感じていた。



**今**の学生は物質面において十分恵まれている。学費や生活費はほとんど親が負担するため、学生達がそこまで追いつめられてバイトすることはない。勉強のできる環境が十分整っており、ほとんどの大学が最新のネットワークシステムなどの充実した設備を備えている。住宅事情においてはキッチン・バス・トイレ付きのアパートに家電製品一式、パソコン、車など、物質的にかなり豊かである。こうしてみると今の学生をとりまく環境は十分すぎるくらい整っているだろう。学生には、彼らの個性を生かして可能性をのばせる多くの時間とチャンスが与えられている。それを生かすか殺すかは、現代の学生一人ひとりの肩にかかっているのである。

**現**在の社会は、政治・経済の面で低迷している。こんな社会だから、未来の世界を構築する学生達に活躍を期待している。一方で学生に失望している面もある。彼らは単なる意見・感想は言えるが、主張はせず、妥協してでも皆と協調しようとするからだ。まるで飼育されているかのような、やけに物わかりの良いものに見えるのである。ただ、裏を返せば良いものにも見えてくる。熱く感情的にならずにやけに冷静でいる分、彼らが合理的・現実主義的であるからだ。そこで社会は、この激しく変化する世界に適応し、何かをしてくれるのではないかという希望を彼らに見ている。

今も昔も社会は学生に対してプラスとマイナスの面を見ている。プラスの面では、次世代の担い手である彼らが社会をよくしてくれるのではないかという期待が主として挙げられる。ところがそれは学生達の新しい価値観の流入を認めているので、大人社会の価値観との間にギャップが生じ、既存の価値観が古いものになってしまった。そのことが社会に負のイメージを抱かせているのである。



### 義理人情では生きてはいけない — 人間関係の変遷 —

**高**度経済成長期を経て日本は過渡期にあり、自然と日本社会への不満も募ってきた。そんな社会を自分たちの力で変えられると信じていた学生は、仲間と本音でぶつかり合い社会への不満・人生における悩みなどを熱く討論した。当時の“華”であった学生紛争をデータベースとし、昔なじみの安い喫茶店で見知らぬ学生とも討論の輪を広げていった。そんな生活が彼らの人間関係における“日常”であったのだ。また高度経済成長期を経たとはいえ彼らは物質的に貧しかったので、互いに支え合って生きていくというある種の連帯感があつたことも軽視できない。

**バ**ブル経済を生きた飽食時代の申し子である現在の学生は精神的な自立、つまり孤独感・虚無感の克服が不十分なのである。いわゆる「親のすねかじり」的な要素の強い学生が多い。その影響で学生の間にある種の協調性が生まれてきた。ここで言う協調性とは人間関係における妥協もある程度は納得できるということだ。要領のいい彼らは無駄な衝突を避け、そのような“協調性”を重んじる傾向がある。集団の和を尊重し、和を乱すものは自然と淘汰されていく。そういう人間関係に満足している学生が現在の大学を彩っているのだ。

このように考えてみると学生の今と昔の人間関係は大きく異なる。総括すると、どちらが良い・悪いということではなく、30年前の人間関係は今と比べて単純であり現在は複雑である。これは日本社会にも共通していることである。政治の複雑化が現在の選挙率の低下を招いているのは明らかな事実であり、30年前はほとんどの学生が政治を理解できた。結局、学生の本質というのは今と昔では大差ないのだ。彼らは時代に合わせて、言い換えれば時代に流されて生きてきたに過ぎないのだ。



執筆：青松・古谷・田中・竹田



# デカイ街での小さなトラブル

《前編》

教務係 甲田政道



30歳の時、一人でロサンゼルスへ行った。初めての海外旅行。海外どころか東京にも行ったことがないのに、無謀にもホテルの予約もせず、往復のチケットだけ持って。慢性的財政困難を訴えるわが家の大蔵大臣の首を縦に振らせたことの代償の大きさなど考えもせず……。

広島バスセンターでいきなり迷った。しかし、そんなことで前途を憂いてはいられない。ソウルでトランジットのための3時間半の待ち時間、汗くさい待合室、アジア航空機内の乗客のやかましい話し声も“何か”が待っているアメリカへたどり着くための税金のようなものだ。

入国審査での長い行列の末、ついにアメリカ入国。お出迎えの人・人・人の通路をくぐり抜け、早速「地球の歩き方」を見てチェックしていたホテルへ電話。しかし、つながらない。巻末の電話のかけ方を見ると番号の頭に1をつけるとある。再度トライ。今度は言葉が通じず途中で切られた。しょうがなく案内所へ行ってダウンタウンへ行きたい旨を伝えた。早口でしゃべる係員に何度も聞き直し、やっとのことで相乗りタクシーに乗った。隣に座ったメキシコ人のような男と話すと、なんと日本を知らないという。私が窓の外を走るRX-7を指さし、あれは日本の車だと言ったが、げげんそんな顔をするだけだった。もう一人のインド人の医者にも聞いたが知らないという。外を走る車の半分は日本車だということに……。日本との距離を実感した。



「俺は知っている。日本のどこから来た？」運転手と言った。「広島から来たのか。アメリカは広島に原爆を落としたよな。」やっとな話の通じる人がいて妙に嬉しかった。途中、「ここはパブリーヘルスだ。」と運転手が言う。「パブリーヘルス？」と聞き返すと「イエース。パブリーヘルス。」となぜか得意げだ。(パブリー=泡のような？、ヘルス=健康？……何のこと？)看板にこうあった“BEVERLY HILLS”と。ダウンタウンで何をするのかと聞くので、ホテルをさがすと言うと、金曜日の夕方にホテルが見つかるわけがない、のんきなやつだ、みたいなことを言って笑う。

結局、その運転手の知っているハリウッド大通り沿いのモーテルに連れていってもらった。部屋はお世辞にもきれいとは言えないが広い冷蔵庫もあるし、テレビも無料。このテレビにはなぜかラジオも付いているがボリュームがどこにもない。冷房のスイッチを入れるとブーンと大きい音がしてなまぬるい風が出てきた。ところが、しばらくすると水滴がしたり落ちてきた。フロントに電話するとすぐ人が来た。対応の早さに感心していると、またかという顔をして、持ってきたプラスチックの器を水滴が落ちる所へ置き出していた。それだけだった。



以上より、現在と30年前では随分と学生の気質が異なるように思える。

しかし本当に現在と30年前では学生の気質は異なるのか。時代は違えど彼らの根底には同じものが流れているはずだ。

「やろうと思えば何でもできる」と今も昔も学生は考えがちだ。大学というところは高校と違い、開かれた空間である。地中に溜まっていた溶岩が一気に噴火するかのように、制度によって押さえつけられていた自我が爆発する。社会の荒波を知らず、理想に酔っている彼らの気質は現在も30年前も変わらないはずだ。また社会にでる前の“ひよっこ”であると自分自身で認識している点も見逃せない。自分に対して責任を確立しているようで、自分に気付けぬところで甘えているという事実があるのだ。これに関連して彼らは自分が熱中するときそのエネルギーは大きなベクトルとなるが、しかしそれが長続きしない、忍耐力・持続性に欠ける一面を持っている。

つまり彼らは自由奔放に振る舞うことが許された特権階級、ある意味“ブランド”なのだ。彼らは既存の価値観に縛られない権利のようなものを持っている。そんな彼らはどんなふうにも30年前型と現在型に“分化”しているのだろうか。

30年前の学生はそんな気質をストレートに表現していた。というよりもストレートに自我をぶつける対象がその時代は存在したのである。いうまでもなく学生紛争である。既存の価値観に縛られない彼らは、自由な発想から新しいものを作るパワーに満ちていた。当時は努力すれば社会を変えられるという風潮があり、行動的で観念的な学生像が形成された。

現在の学生はそのような気質がストレートに表されていない。現在は30年前のように単純に熱中できる対象が少なく、仮にあったとしても日常生活に体力をねこそぎ奪われている彼らは余程のことがなくては熱中できない。かといって彼らの情熱が薄れたわけではない。興味の対象が細分化された現在が故に、エネルギーの発揮場もまた個人個人に依存しているのだ。

情報が溢れている現在では社会に対する矛盾に気付きながらも、それを認めなくては生きていけない。ある程度物事を割り切る能力が必要とされるのだ。その結果周囲に干渉しない学生が増えてきた。しかしこれは別に悪いことではない。これは冷静に状況を判断して、他人を認めることにより協調性を重んじる学生が増えてきたということだ。このような平等・寛容精神こそが現在の学生の長所である。

結局、学生はいつの時代も一定の年齢層を占めるから、その気質が変わらないのは当然だ。それがその時代時代に合わせて変化しただけだ。どちらが良い悪い等というのではなく、最適の学生に“進化”したに過ぎないのだ。30年前では、社会復興のため自己主張型の学生が重宝されたし、グローバル化の進む現在では協調性があり合理的である学生が適しているのだ。

(終)



とりあえず近くのメキシコ風の料理屋で見たこともないものを腹に詰めた。意外にうまかったが、なにぶん量がハンパじゃない。飛行機の疲れもあって半分くらいしか食べきれなかったので、残りをテイクアウトしてもらった。いつの間にかずうずうしくなっていた。帰りを見るからに怪しげな店でビールと日本では手に入らない雑誌を買った。ところで、ビールを買う時、この店以外の店では歳を聞かれ、時にはパスポートの提示を求められた。はじめはつまらんジョークかと思っていたが、後から人に聞くと、アメリカでは州によってはアルコールを販売する時、客が21歳以上であることを身分証明書で確認しないとイケないらしい。むしろ自動販売機でアルコールを買うことのできる日本の方が珍しいくらいなのだそうだ。そういえばL.A. で見た自販機はコーラと新聞の自販機だけだった気がする。もっとも、その大半は壊されているか故障していたが。

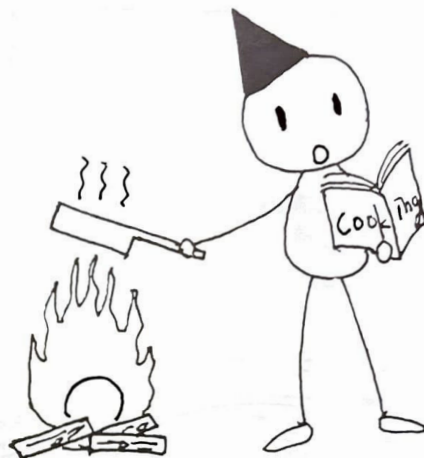
モーテルの部屋に戻りビールを1本飲むと、機内でほとんど眠れなかったせいか眠気が襲いベッドに横になった。遠くでパーンと銃声があった以外は案外静かだった。日本を発つ前夜も興奮してほとんど眠れなかったせいか久しぶりにぐっすり寝た。まだ暗いうちに目が覚めた。そういえば『地球の歩き方』にこのモーテルには、24時間、コーヒーのサービスがあると書いてあった。フロントへ行って見ると確かにインスタント・コーヒーとお湯の入ったポットがあった。まあこんなものだろう。

フロントに日本人向けツアーのパンフレットがあったので申し込んだ。その日は一日市内観光をしたあと、知り合ったツアーの参加者3人と街へ出た。満員で入店できなかった“ハウス・オブ・ブルース”(エアロスミスのスティーヴン・タイラーの店)の前で突然、ブロードの超ミニのお姉さんがひっくりかえった。夜、サングラスなどかけてはほんとのアメリカの景色は見えないことを痛感した。



グリフィス展望台から火の海のような夜景を見て鳥肌がたった後、ダウントウンへ行った。ここは昼間の活気あるビジネス街とはまるで別の場所のようだ。集団同士で喧嘩をしているのはどう見ても子供だった。また昼間、ベニスビーチ近くで目撃したオープンカーで暴走する“ギャング”と呼ばれる少年のグループ

(日本の暴走族と違うのは銃を持ち人を平気で殺すところ)に、近年、犯罪の低年齢化が進む日本の近い未来の姿を見た気がした。大通りには観光客も多くいてまだまだ活気のあるハリウッドだが、路地を一つ入るとその表情は豹変する。一度、逮捕現場に遭遇した。一人の男が二人の警官に取り押えられていた。まるで映画の1シーンみたいに。



その後、サンタモニカへ移動した。モーテルではなくホテルにした。部屋は格段にきれいだが冷蔵庫がないのは痛い。買って来たビールは洗面台に栓をして水を入れて冷やした。この、冷蔵庫の代わりに水というのはL.A. では一般的なシステムのようなのだ。

サンタモニカといえばビーチ。「きてーきてーきてー」と口ずさみビーチへ行った。海水は汚いが砂浜はとてもきれいで驚いた。きれいなのは砂浜だけではないのは言うまでもない。テレビや映画で見る映像は嘘ではなかった。2日間その映像の中にとっぷり浸かった。

知り合った韓国人女性と見た夕暮れのビーチの美しさは忘れられない。彼女は青山学院大の留学生だそうで、話が盛り上がり、夜ステーキを食べに行った。日本の1/3ほどの値段と異様なほどの大きさに驚いた。

次の日、ラスベガスへ行くという彼女と日本での再会を誓い(まだ果たされていない)別れ、またハリウッドに舞戻った。

モーテルで、ツインしか空いていなかったがシングル料金でいいと言うのでそこに決めた。ベッドで横になると隣の空いたベッドが妙にもったいなく感じられた。外へ出て通りをさがした。すると、いたいた。ガイドブックとにらめっこをしている私と同じ臭いのする日本人(もちろん男)が。彼に声をかけた。フロントのおばさんに見つからないように部屋を見せると、彼は部屋代折半(17ドル)という契約でルームメイトになることを了承した。夜、それまで一人で行く勇気がなかったライブ・ハウスへ彼とともにいった。バンドをしている者には避けては通れない、かの“ROXY”へ。かつてのL.A. メタルの聖地で見えたものは、正統派ハードロック、ヘヴィメタルの衰退が伝えられて久しいアメリカの新勢力であるグランジ、オルタナティブの台頭を証明するバンドやバンテラのフィリップ・アンセルモの物真似、その騒音にあわせて、押さえきれない日常の怒りをぶつけるかのように暴れまくる聴衆だった。期待はしていなかったがここまでとは・・・肩を落とす私に「いいですねこれ!何というジャンルの音楽なんですか?」と妙にうれしそうなるルームメイトの彼。音楽の好みは十人十色だし、彼のおかげでライブハウスへ来ることができたんだからと「こんなが好きなら、〇〇〇や×××を聴いたら気に入ると思うよ。」と親切に教えてあげると、彼はテーブルを離れてステージ前へ行き、手を回しながらグルグル走り回っている輪の中へ入っていった。そんなこんなでアメリカ最後の夜は更けた。

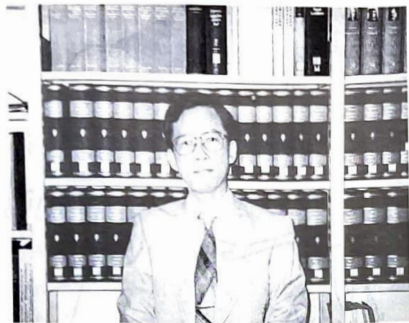
→ 次号へ続く!!

## 佐藤正樹研究室

人間文化コース 助教授  
(A 3 0 2)

### プロフィール

愛知県生まれ。名古屋大学文学部、名古屋大学大学院修士課程終了。その後奈良県立医科大学、金城学院大学を経て1985年広島大学に赴任。今に至る。



### 研究内容

大学時代はドイツ語を中心に研究を進めていた。だが、広大総科に赴任してからは他の学問の影響を受けて近世・近代ドイツ語圏、日常史・庶民史・文学研究などドイツ語圏を中心とした庶民文化を研究している。あえて専門をいうところだが先生の主張は「総合科学部なのだから専門というものを強調したくない」である。

### 大学生時代の生活・環境

図書館に入り浸り、ドイツ語の辞書をむさぼり読む。当時、学生紛争の影響で授業の邪魔をされたこともある。

## 「享樂は人を低俗にする」

## 「青春は酒なしで酔う」

### 今の学生への警告

実益本意になりつつあり、産学共同は望ましくない。学問に対する意欲が甘く楽な道ととりがちである。先生の持論として「学問は苦行」。

(取材：青松伴見)

## 佐竹 昭研究室

地域文化コース 助教授  
(A 5 1 3)



右端が佐竹先生

### 研究内容

古代を中心に：中国などとの比較対照の視点から、日本の政治諸制度や思想文化の形成過程・源流とその特質を考える。ただ厚いだけで売れない本（ご本人談）を最近出した。

前近代の瀬戸内地域史について：他地域と比較しながら瀬戸内地域の暮らしと文化の特質を考える。

いずれも特色ある地域文化の形を探るものである。



### 略歴

和歌山県出身。小さい頃は化石少年でした。高校の頃歴史に興味を持ち、学校の先生になろうと思って広大教育学部に入部。当時は教科内容重視だったので文・政経学部などの講義をとるうち、古代史の面白さに気づいていきました。その後広大文学部の大学院に行き、卒業後は総科に移ってきて今に至っています。

趣味は「研究」。昔の建物などを見ていると、美しいと思うと同時に、学生に見せる写真のための良いアングルを考えてしまうそうです。

### 学生の方から一言

世話見が良くて、学生思い。  
おしゃべり好きで、一度つかまるとなかなか逃げられない。  
大変知識が豊富で、何について話し合っても圧倒されてしまう。魚に詳しい。



(取材：飯寺・古川)





中央が安野先生

## 安野正明研究室

社会科学コース 助教授  
(A 8 1 3)

### 研究内容は？

戦後ドイツ史の研究に取り組んでおり、旧西ドイツを中心に主に次の3点について研究しています。

1. ドイツ社会民主党を軸にした政党史
2. 第2次世界大戦後の占領改革
3. ドイツの分断から統一に至るまでの国際政治史

今はドイツにどっぷりと浸かっていますが、日本人ですから、日本の問題にも関心を持っており、いつか比較的研究ができればと思います。

### 現在の研究を始められたきっかけは？

院生時代の指導教官の示唆もあって、戦後ドイツ社会民主党の再建を修士論文のテーマに取り上げ、それ以来、仕事のろいからでしょうが、社会民主党史から離れられずに現在に至っています。

ただ、自分が何をやりたいのか、なぜそれをやりたいのか、絶えず自分に問い続けることが大切だと思います。

### 研究室の雰囲気を見せて下さい。

現在ゼミ生は3年生1人、4年生1人です。私はなるべく生徒の自主性に任せて研究してもらうようにしています。

### 総科生に対して一言

語学力は早く身につけた方がいいが、総科という何でもできる学部にいるのだから、専門特化は急がず、幅広く学ぶべきだと思います。大事なのは勉強する姿勢を身につけることで、そうすれば、学部卒業後の世界に行っても対応できるのではないのでしょうか。

### 先生の研究の対象であるドイツについて伺いました。

ドイツへは大学3年の夏以来、何度か行っています。「ロマンティックなドイツ」を夢見て行くくと幻滅すると思いますが、うまいビールが安く飲めるので、良いところだとも思います。

(取材：石川・伊藤)

## 吉田光演研究室

外国語コース 助教授  
(A 3 2 4)



中央が吉田先生

### 先生の専門は？

ドイツ語学

言語学：言葉を通して人間の思考、心を分析する。独語、英語、日本語を比較しながら、それぞれの共通点、違いを研究している

### 趣味は？

フォークギターでフォークソングを楽しむこと。絵を観たり(好きな画家はクレー、ダリ)絵を描くこと。今のところは娘とコンピューターのソフトで絵を描いたりしている。(娘は2歳の頃から始めていて、今やエキスパート)

### 外語の雰囲気は？

自由な雰囲気。ネイティブスピーカーの先生と話すのも楽しい。II群ドイツ語専攻では学生もドイツへ出かけたりと熱心である。留学をして帰ってくるとかなり自信がつくようだ。

### 院生に先生について聞いてみました

子煩悩：授業中の例えがよく娘さんの話になる。

コンピューターおたく？：外国語情報センターなどの仕事をついつい引き受けてしまう。

(愚痴もよくこぼす)

説明が上手・人気がある：論文などもわかりやすく教えてくれる。

学生の立場に立って考えてくれる。

ドイツ語専門の学生が少ないのもっと来てほしいそうだ。

(取材：井上・松田)

### 学生へのメッセージ

言語を勉強する事は、他の学問よりも易しいものだと考えられがちだが、言語はただ頭に知識を蓄えていくばかりではなく、声に出して身につけていき、その国の文化、社会の習慣を知ることができる。これらは、これからの大学に必要なもの。柔軟な人間になれる。

### 先生の好きな学生のタイプは？

人の言う事を聞いているばかりではなく、興味、主張を言える人。そしてユーモアのある人。

## 奈良重俊研究室

数理情報科学コース 教授  
(C701)



上段中央が奈良先生

### 研究内容

- ・生体のすばらしい制御や脳神経系の情報処理のからくりを探りたい。
- ・その結果を工学的に応用したい。



### 研究を始めたきっかけ：

大学院（博士課程）を終えてから10年ほど物理学を研究していたが、15・6年くらい前からだんだん生体のしくみに興味を持ち始めた。

### 研究の魅力：

生体の持つ仕組みの素晴らしさ、原子、分子の集まりで構成された脳に心が宿る不思議など、数え切れないほどある。

### 総科の学生に一言：

学問の始まりには日々楽しいとは限らないようなときもある知的トレーニングが必要だが、統けるうちに過去から積み重ねられてきた学問の広さ、深さが見え感動を味わえる。あきらめないで自分なりの高みへ到達して欲しい。

### 取材の感想：

おもしろかった。みんな快く取材に応じてくれて嬉しかった。楽しくて良い雰囲気の研究室だった。

(取材：古川恵里)

## 藤井博信研究室

物質生命科学コース 教授  
(C117)



右端が藤井先生

### Q. 研究内容を教えてください。

- ◆現在、クリーンエネルギーとして水素が注目されています。この水素をエネルギーとして利用するためには、高機能の水素吸蔵物質が必要です。水素をより多く貯蔵でき、吸・放出性に優れた合金を開発するための基礎研究を行なっています。
- ◆新しい磁性材料の開発研究
- ◆強相関係電子系の磁性と超伝導

### Q. この研究を始めたきっかけは何ですか？

理学部の大学院にいた時、磁性体の研究をしていました。この分野は、常識とは違った領域で、そのようなところに興味を感じました。また、世の中の役に立ちたいとも思っていました。水素については、エネルギーや環境問題を解決したいと思って始めました。

### Q. 将来の夢は？

世の中の役に立つ何かを残すこと。

### ★学生に一言

- ◆チャレンジする精神を持ってほしい。
- ◆遊ぶのもいいけど、勉強もして下さい。

### ★研究室の雰囲気は

明るく楽しくやっています。先生は、気さくな人で、いろいろと相談にものってくれます。



(取材：原田晶子)



## 櫻井直樹研究室

自然環境研究コース 教授  
(C424)



左から4番目が  
櫻井先生

### ■研究内容

櫻井研究室は自然環境コースの中でも生物系の研究室で、その中でも植物の生理学を中心に研究が行われている。具体的には、大きく二つの視点から研究がすすめられている。

一つは、“植物から見た環境”という視点だ。植物は環境からの影響を受けて成長の調節を行うが、それには植物ホルモンの働きがあり、その結果として細胞壁の変化が現れる。植物ホルモン、細胞壁を研究することで、環境問題を考えていこうとしている。

もう一つの視点は、“環境から見た植物”というものだ。今、大気中のCO<sub>2</sub>濃度の増大という問題がある。この問題を植物の細胞壁の主成分であるセルロースを新しい燃料にする事で、解決できるのではないかと考えている。植物を育てることで、大気中のCO<sub>2</sub>を吸収してもらい、その植物を燃料にすることでCO<sub>2</sub>の収支を±0にしようとしている。今、このセルロースをいかにローコストで粉末にするか、ということの研究をしている。

### ■先生から学生に一言

「よく遊び、よく学べ」

よく遊んでいる人が、よく学んでいるとは限らないが、学生のうちはやりたいと思ったことは何でも挑戦してみる方がいい。無駄が多い方がいい。いつか役に立ったと思える日が来るはず。

### ■研究室の雰囲気

実験室にも邪魔させていただいた。実験室は、混沌としていて、何がなんだか分からない。一見無秩序に思われるが、研究室の皆さんはわかっているらしい。超発ガン性物質もいっぱいあるらしくちょっと怖い。ただし、やっている研究は最先端のものである。櫻井研究室の名誉のために。

### ■おわりに

櫻井先生は、ギターとビリヤードを愛する、かっこいい先生でした。研究室の学生さんの話では、ワープロのフォントなど妙にビジュアルにこだわるところがあるとか。先生が学生の頃は真面目で人付き合いの悪い学生だったそうですが、結構話しやすそうな感じでした。本当のところはどうなんだろう？

(取材：永山啓一)

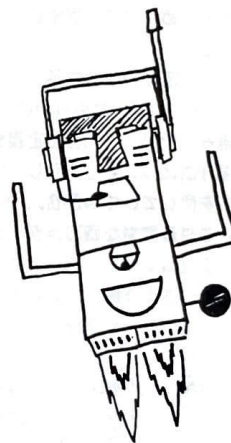
## 坂田桐子研究室

生体行動科学コース 講師  
(A221)



### 研究テーマ

社会心理学の対人影響過程で、特に「性差」の発生のメカニズムを中心に研究しています。具体的には、リーダーシップ行動や、それによる効果が性別によってどう異なるのか、またその差を発生させる要因は何か、ということ等について調べています。



### 今ハマっているもの

「やっぱりワールドカップ」だそうです。先生はそんなにスポーツは好きではないのだけれども、なぜかサッカーは好きだとのこと。今なんと言っても社会的話題であり、リーダーシップなどの社会心理学的に見てもいろいろ興味が出てくるそう。しかし、純粋にサッカーを楽しんでいるのには変わりないと。

D.S. 高校時代はテニスをしていたそう。

### 最近の学生について一言

自分が本当にやりたいことをこの大学で見つけてほしい。

それが学問以外でもいいから。今の学生は何となく暮らして何となく卒業する人が多いように見える。だから、もっといろんなことに積極的に活動して、そして自分の足で自分のやりたいことを見つけていってほしい。たとえそれが無駄足になったとしても。

(取材：前田和寛)